

1. 研究背景・目的

子供部屋は個の自立を育むための空間として重視されていたが、子ども部屋の存在が家族のコミュニケーションを阻害している、部屋への閉じこもりが非行や精神障害の原因を作っているなどの理由から子どもの個室所有が疑問視される動向もある。本研究では改めて現代の住宅にとって重要な子供の空間のあり方を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

室名調査、月刊ハウジング(実際に建てられたハウスメーカーの住宅)、ハウスメーカーのホームページ、ハウスメーカーにて設計職で勤務されている方への聞き取り調査、住宅特集(建築家が建てた住宅)、以上から子どもの空間について調査する。

3. 子どもに関する社会情勢と空間の変遷

1986年から2018年の住宅特集1月号に掲載されている住人に子どもが含まれる住宅を対象とし、子どもの使用を目的とした部屋の名前と子供部屋以外の学習空間の推移とその時の社会情勢を調査した。図1より最も子供部屋が使用されたのは1986年～1990年で72%、1988年子供部屋で犯行が行われた事件などから個室弊害論が生まれ、それ以降は50%を下回った。1996年には共働き世帯数が専業主婦世帯数を上回り差が開き始め、インターネット利用が一般化された2001年～2005年では子供部屋使用率が32.5%と最も低い。また子供部屋以外の室名についても調査した結果

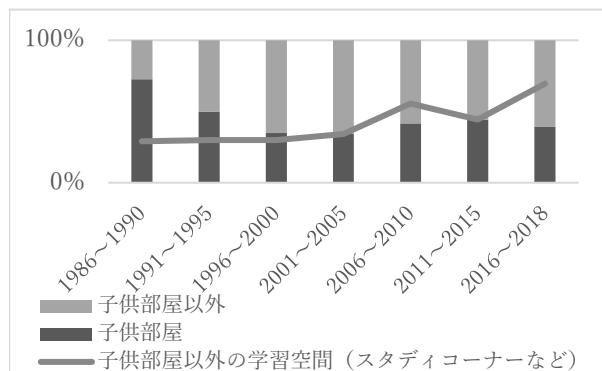


図1 雑誌住宅特集にみる子供部屋の呼称と学習空間の推移(n=271)

果、一番多く使用されているのは「個室」で49回、次に「寝室」46回であった。子供部屋以外の学習空間も増加傾向がみられる事から子供部屋という名前は一般的ではなくなり、日本の特徴である勉強部屋として捉えられている子供部屋が、子供部屋以外でも学習できるような空間が増え、学習以外の使い方がされている傾向にあると予想できる。

4. 月刊ハウジングに見る子どもの空間の変遷

2008年から2018年の各8月号の「月刊ハウジング」に掲載されている「実例特集」における住人に子どもが含まれる住宅を対象に調査した。子どもの空間に関する特徴として、子供部屋の可変性、子供部屋以外に子どもが使用することを想定された空間があることが分かった。図2より可変性については2008年以前から一般的になっている。一方、子供部屋以外の子供の空間に関しては年によりばらつきはあるものの増加傾向がみられる。さらに子供部屋以外の子供の空間について名前が「ファミリー」がつくものから「スタディ」がつくものが多くなっており、場所は子供部屋と同じ階から階段やリビングダイニングが多くなっている。

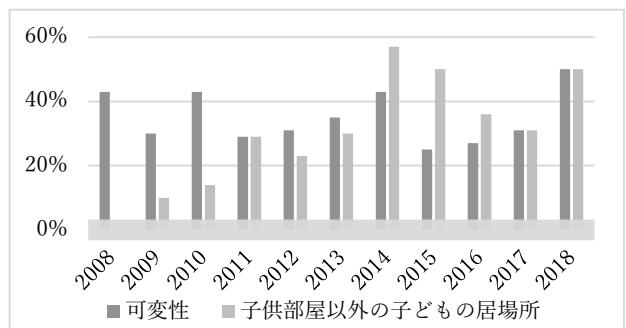


図2 過去10年間の子どもの空間(n=155)

5. ハウスマーカーにおける現代の子供部屋の特徴

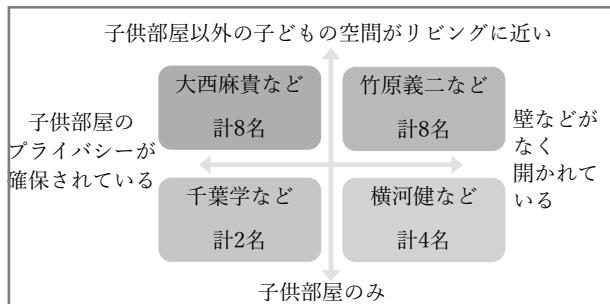
7社のwebサイトから子供部屋に関して調査を行い、すべてのメーカーで可変性、子供部屋以外の子供の使用を目的とした空間があることが分かった。また半数以上のメーカーが子供部屋に机がなくベッドのみが置かれている。子供部屋が「勉強部屋」から寝る空間に変化していることが分かる。

6. 設計職勤務の方への聞き取り調査

実際にハウスメーカーで設計職として勤務されているMさんへの聞き取り調査を行った結果、子供部屋は小さくなってきており、子供部屋以外の学習空間の位置は階段ホールからリビングダイニングに移ったということが分かった。

7. 近年の建築家による住居の子供の空間への提案

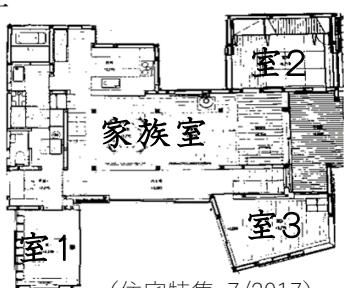
住宅特集より子どもの空間について述べているのべ
22名の建築家の特徴をまとめ分類分けをした。



ゾーンやエリア、はなれなど子どもの部屋の名称がさまざまであった。竹原義二、千葉学、大西麻貴・百田有希に注目した。

鶴の里の家 竹原義二

形やレベルなど様々な部屋を設け「室1」といったような用途を限定しない室名にしている。竹原は『どこまでが誰のための場所かは、和気藹々と、時に喧嘩しながら決めればいい。』と述べている。



(住宅特集 7/2017)

様々な居場所となるような空間を設け自分の居場所を決めていく過程での家族とのコミュニケーションを重視しているように考えられる。

片瀬山の家 千葉学

各個室が吹抜けや階段室と面しており、窓を開けることで他の部屋と繋がる。千葉は『個室が小さな家のようにして連なりながら、独立することなく家全体と繋がり、さらには家全体の質を決定する』と述べている。



(住宅特集 1/2015)

各個室が他の部屋や家全体とのつながりを持つことでひとりの時間を過ごしながらも家族の気配を感じられる、今日的な家族とのコミュニケーションを重視して

いるように考えられる。

小屋と塔の家 大西麻貴、百田有希

上階に上がっていくにつれてテラスを通るため屋外空間も生活空間の一部としている。大西らは『最上階の5階は子どもたちが遊ぶ場所で、街から頭ひとつ飛び出した「空中のはなれ」からは周辺の街が海原のように見渡せる』と述べている



(住宅特集 1/2016)

家族と離れて街を見渡せるはなれを子どもの部屋としていることで、家族だけではなく街との関わりを子どもに持たせようとしている。

8. 結論

- 子供部屋などの室名は減少しそれ以外の名前が一般的になってきている。学習は個人の部屋以外で行う工夫がなされ日本の特長である「勉強部屋としての子供部屋」ではなく子どものための部屋の使用目的が学習以外のものになっている。
- 子供部屋を可変的に考えることはハウスメーカーでは一般的で、子どもが小さいときは子供部屋ではなく共同の学習空間で勉強するような設計がされている。共同の学習空間の場所も階段ホールから階段やリビングダイニングと親が子どもの学習に関わりやすい設計になってきている。
- 建築家は子どもを個室に閉じ込めないような工夫をしている。方法は様々で、個室以外に子どもの居場所となるような空間を設ける、個室自体に他の空間とのつながりを持たせるなどが挙げられる。コミュニケーションの対象も家族だけではなく「まち」に向いている建築家も中にはいる。
- 子どもの空間のテーマが自立、個室無用、学習を経て部屋とは別に子どもの使用を目的とした空間を設けることで居場所を個室から外に向かつたる。

「参考文献」

- 1) 北浦かほる「世界の子ども部屋：子どもの自立と空間の役割」井上書院, 2004
- 2) 天野正子、石谷次郎、木村涼子「モノと子供の戦後史」吉川弘文館, 2007
- 3) 「月刊ハウジング」リクルート, 2008-2018
- 4) 「新建築住宅特集」新建築社, 1989-2018